

# 旅行報告書

会派名 創水会

会派代表者 高岡 利治

平成 26年6月3日

旅行者氏名	旅行者氏名
高岡 利治	大川 末長
真野 頼隆	谷口 明弘

下記の用務のため旅行しましたので報告いたします。

1 期間 平成26年5月13日(火曜日)から

平成26年5月15日(木曜日)まで

2 旅行先及び用務の概要

旅行先	用務の概要
兵庫県姫路市	姫路市役所 ・地域夢プランについて
兵庫県南あわじ市	南あわじ市役所 ・淡路玉ねぎについて
徳島県徳島市神山町	神山町農村環境改善センター(NPO法人 グリーンバレー) ・移住支援について

## 創水会行政視察報告書

### 1 派遣者

大川 末長  
真野 頼隆  
高岡 利治  
谷口 明弘

### 2 視察日時・視察先・視察項目

5月13日(火) 兵庫県姫路市 「地域夢プラン事業について」  
5月14日(水) 兵庫県南あわじ市 「淡路たまねぎについて」  
徳島県神山町 「移住支援について」  
5月15日(木) 移動日

### 3 視察の概要

#### ■ 5月13日(火) 兵庫県姫路市 「地域夢プラン」について視察

現在修復中の姫路城(別名:白鷺城)を有する姫路市。人口534,000人の城下町。最近ではNHKの大河ドラマ「黒田勘兵衛」人気にあやかって観光客の誘致に取り組んでいるようで駅周辺やあちらこちらにポスターが目立つ。さて、研修内容の地域夢プランは住民自ら、地元の歴史や文化、自然などの地域資源を活かして、自分の住む地域に活気を取り戻そうという事業。初めは市長の肝いりで平成16年に始まったこの事業。平成24年度のいったん完了したのだが、地元住民の継続を望む声が多く、平成25年度には再びかたちを変えて継続している。主な取り組みに地域資源マップ作り、地元発見ウォーキング伝統芸能伝承事業などがある。初めは地域担当職員を配置し、事業の趣旨を丁寧に説明し、地元の組織作りややる気の醸成に取り組んだ。視察の最中、本市議員とも活発な質疑応答が為された。一つ水俣と事情が違うのが各地域に自主財源の予算をつけられるという自治体規模の違いを強く感じた。

#### ■ 5月14日(水) 兵庫県南あわじ市 「淡路たまねぎ」について視察

次に訪れたのは、兵庫県南あわじ市。まず、島の大きさに驚いた。淡路島の中に、北から淡路市、洲本市、南あわじ市の三市が存在し、島の中を高速道路が通り、南北53キロメートルもある。北端は明石海峡大橋、南端は鳴門海峡大橋で本州と四国に結ばれており、南北からの観光客を見込める好立地である。さて、視察項目の淡路たまねぎであるが、水俣のサラダたまねぎと同様若しくはそれ以上に全国ブランドとして認知度の高い淡路たま

ねぎ、全国シェアは約10%もある。何と言っても驚くのは、水俣と違って作付けから収穫まで機械化が進んでいるという点である。それに早生にはこだわっていない。また、淡路たまねぎを原料に、ふりかけ、せんべい、ラーメン、レトルトカレー、かりんとう、スープ有りとあらゆる商品が開発され、道の駅「うずのくに」には所狭しと商品が陳列してあった。これには驚いた。しかも、商品開発はJAでは無くて民間の業者が多数チエを絞って商品化しているとのこと。水俣のサラダたまねぎも今後、機械化や新商品の開発に取り組まなければならないと感じた。ただし、味は水俣のサラダたまねぎの方がまさっている。

■ 5月14日(水) 徳島県神山町 「移住支援」について視察

午後から、徳島県に入り、山間の町神山町農村環境改善センターに入った。ここは、かつて小学校の跡地で、閉校した校舎を地域のコミュニティーセンターとして利用しその管理を含めてNPO法人グリーンバレーさんに任せである施設である。このグリーンバレーというNPO法人と行政が協働で地区の空き家に都会からの移住者を誘致しているのである。徳島県はもともと、県知事の意向で全域に光ファイバー網を整備している。更に同町出身の大南理事長の熱意で僅か6300人の山里に今、IT企業の若き経営者達がサテライトオフィスを続々と神山町に開設しているのである。更に、空き家を改装して、手に職を持った人を逆指名で移住してもらおう。例えば、神山町にパン屋が無ければ、パン屋を営業したい人を募集するといった手法がうけて、人が移住してくると言うのである。自治体毎に移住促進課なるものを設けて必死に人口減少に歯止めを掛けようとする自治体が増える中、この町の取り組みは一考に値する思うが、理事長の大南さんの発想力、行動力、人脈に頼る部分が大きいなと感じた。しかし水俣も人材という意味ではこの程度の人口規模にしては他の自治体に引けを取らない。コーディネートするまたは出来る人材の登場が一番望まれるところである。しかし、IT化は何とか進められないか強く感じた。

# 旅行報告書

会派名 創水会

会派代表者 高岡利治

平成26年10月20日

旅行者氏名	旅行者氏名
大川末長	高岡利治
真野頼隆	淵上道昭
谷口明弘	岩村龍男

下記の用務のため、旅行しましたので報告いたします。

1 期間 自:平成26年10月8日(水曜日)

至:平成26年10月9日(木曜日) 1泊2日

2 旅行先及び用務の概要

旅行先	用務の概要
福岡県北九州市	中小企業テクノフェア in 九州 2014 等の見学

## 創水会行政視察報告書

### 1 派遣者

大川 末長  
淵上 道昭  
真野 頼隆  
高岡 利治  
岩村 龍男  
谷口 明弘

### 2 視察日時・視察先・視察項目

10月8日(水) 福岡県北九州市 「エコテクノ2014」  
10月9日(木) 同上

### 3 視察の概要

#### ■ 10月8日(水)～9日(木) エコテクノ2014について視察

北九州市の小倉で開催されたエコテクノ2014/中小企業テクノフェアin九州2014を視察した。北九州市は、日本の近代産業の先駆けとなり発展してきた歴史を持ち、かつては日本の4大工業都市として発展してきた。しかし、水俣市同様、住民の生命や健康をおびやかす深刻な環境汚染を引き起こし、その後、長い年月をかけて、克服してきた。近年は、さらに快適な環境のまちをめざして、多くの努力を重ね、成果をあげてきた。水俣市の目指す環境に配慮したまちづくりの先進地として名高いまちである。

今回の視察の目的は、そのような背景を持つ北九州市でエコテクノ2014と銘打って開催された地球環境・新エネルギーに関する技術展とセミナー、再生可能エネルギー・燃料電池・蓄電池技術展とセミナー、“ものづくりの街”北九州で進化し続ける中小企業のための展示会などを視察して、水俣市の活性化に生かせるヒントを見つけるという目的で行った。

地球環境・新エネルギー技術展では北九州市、新日鉄住金グループの企業や九州大学などの90近くの団体や企業が、最先端のテクノロジーを使った風力発電やスマートコミュニティー創造事業、LED照明、ペットボトルのリサイクル事業などを紹介するブースを設けていた。私が特に興味を持ったのが北九州スマートコミュニティー創造事業のブースだった。これは八幡東区東田地区に立地する新日鉄住金で製造過程で発生する水素を利用して発電し、16のスマートスポットで使用されるエネルギー量を自動化された省エネ監視・制御システムで最適化して電気を供給するというもの

だ。16のスマートスポットには北九州市環境ミュージアムや北九州市立いのちのたび博物館などの公共施設はもとより、新日鉄住金の社員寮、高齢者向けの介護施設、病院、イオンモールなどの商業施設、さらには一般市民のモデル住宅にまで電気を供給するというもの。この事業は国の「次世代エネルギー・社会システム実証のモデル事業」として進められたものだ。水俣市も今後、積極的に国の補助金を活用しながら環境ビジネスが雇用につながるような取り組みを進めていかなければならないと強く感じた。

中小企業テクノフェアでは福岡県内の中小企業約40社に加え佐賀県、大分県、熊本県などの企業がブースを設けて自慢の技術をアピールしていた。熊本県からは1社出展していたが、ゆくゆくは水俣市からもこのような展示会に複数の企業が出展するような状況になることが望まれる。

いずれにしても、同じく環境首都を目指してしのぎを削ってきた北九州市と水俣市だが、目指す理想があまりにも違っていると感じた。今後水俣市も官民一体となって環境に特化した産業で雇用が生まれるような取り組みを進めていきたいと感じた。

以上

# 旅行報告書

会派名 創水会

会派代表者 高岡 利治

平成 26年11月7日

旅行者氏名	旅行者氏名
高岡 利治	大川 末長
真野 頼隆	谷口 明弘
淵上 道昭	岩村 龍男

下記の用務のため旅行しましたので報告いたします。

- 1 期間 平成26年10月21日(火曜日)から  
平成26年10月24日(金曜日)まで

## 2 旅行先及び用務の概要

旅行先	用務の概要
北海道市稚内市	稚内市役所 ・太陽光・風力発電について
北海道岩見沢市	岩見沢市「であえーる」岩見沢 ・中心市街地活性化事業化について
北海道夕張市	夕張市 ・財政再計画について

## 創水会視察研修報告（稚内市）

平成26年10月22日、北海道稚内市が取り組む再生エネルギーについて視察研修を行いました。

稚内市は人口約36000人、面積約760平方キロで基幹産業は水産、酪農、観光で、ロシアへの玄関口として大きな役割果たしているとの事でした。

稚内市の「まちづくりの基本」は「人と地球にやさしいまちづくり」で、環境都市宣言をされており、その政策の一環でメガソーラーは（東京ドーム3個分）、風力発電は、平成10年～平成17年の8年間で風力発電74基、平成18年～現在までに、メガソーラーに取組み、今後は生ごみ等にてバイオエネルギーセンターを計画されております。

気候的には、風力発電には適した土地柄で、市内の年間電力消費量の85%相当（76355KW）を発電、今後は10基増の予定で平成29年には市内の110%に相当する（106355KW）発電を予定計画されておりました。

ソーラーについては、日照時間が短く、冬場の雪対策など九州地方では考えられない対策や工夫をされておられました。

稚内市の再生可能エネルギーへの取組みの方向性としては、大規模発送電基地としての役割を果たすために「送電網整備実証事業補助金、平成25年度政府予算250億円」が計上、平成26年度は、150億円の補助金が交付され、北海道北部の電力はもとより、本州への送電なども計画されており、市としての計画としては、とても大きく感動しました。

また、バイオエネルギー発電については、生ごみ等を利用して展開されることでしたが、現在、稚内市に焼却施設が無いということにびっくりしました。現状はすべて埋立処分ということで、これも地域性で説明を受け納得したところでした。

最後に、全国各自治体にて再生可能エネルギーに取り組まれていると思うが今回、稚内市役所の取組みはすばらしいとの一言でした。

エネルギーの地産地消を謳われるところなど、勉強になりました。

平成26年11月

創水会 岩村龍男



○<岩見沢市・中心市街地活性化事業について>

(10 月 23 日)

平成 20 年に「岩見沢市中心市街地活性化基本計画」について国の認定を受け、平成 22 年に「商業業務集積地区活性化ビジョン」を策定。複合駅舎や駅前通りの整備、ポルタビルの再生、生涯学習センターの整備、市営住宅の整備ほか、ソフト事業等に取り組む。

しかし、少子高齢化や人口減少が進み、コンパクトなまちづくりが求められ、中心市街地全体を対象に計画を策定。

① まちなか活性化の必要性

- ・少子高齢化や人口減少に対応したまちづくり
- ・公共施設の老朽化対策や後進に係る費用増大による財政の圧迫
- ・中心市街地の空洞化、産業立地の衰退、住環境への影響。

② まちなか活性化の目的

- ・中心市街地に求められる役割 → 多様な都市機能の集積と都市サービスの提供。

③ まちなか活性化計画

- ・目標年度と基本指数 → 目標年度は 10 年後の平成 35 年とする  
人口 5,000 人以上を目指す
- ・計画区域と地区の役割 中心市街地を 3 つの地区に分け再生を目指す  
(駅北地区・商業業務集積地区・商業業務集積地区を囲む地区)

④ まちなか活性化の基本方針

- ・住みたいと思う暮らし環境づくり
  - ・ふれあいと交流のある賑わいづくり
  - ・地域産業の活力を生み出す環境づくり
- この 3 つの基本方針にそれぞれ課題、目標値、施策がある

⑤ まちなか活性化の推進に向けて

- ・まちなか活性化の流れ 空き店舗、空き地を活用した魅力ある交流や憩いの場の整備。ロノ字回廊の充実、整備効果が中心市街地へと波及
- ・まちなか活性化計画の推進体制 → 「まちなか活性化の将来像」の実現に向け中心市街地活性化競技会、まちづくり会社や活動団体および市民が、それぞれの役割を果たし、お互いに協力して取り組む事とする

## 創水会行政視察報告書

### 1 派遣者

大川 末長  
淵上 道昭  
真野 頼隆  
高岡 利治  
谷口 明弘  
岩村 龍男  
福田 斉

### 2 視察日時・視察先・視察項目

- 10月22日(水) 北海道稚内市 「再生可能エネルギーの取り組みと展望」
- 10月23日(木) 北海道岩見沢市「中心市街地活性化事業」
- 10月23日(木) 北海道夕張市 「財政再建と地域再生の取り組み」

### 3 視察の概要

#### ■ 10月23日(木) 北海道夕張市 「財政再建と地域再生の取り組み」について視察

午前中に岩見沢市の「中心市街地活性化事業の取り組み」について研修をした後、約1時間ほど車で移動すると夕張市に入る。夕張市の視察は午後3時からと1時間程度と先方から指定があり、午後1時過ぎには夕張市に到着した我々は、2時間あまり時間をつぶすことになった。そこで、町の雰囲気を見て回ろうとまずは、夕張の物産館のようなところに立ち寄った。水光社陣内分店くらいの広さの建物の中に、一部、炭鉱の展示物などやお土産売り場があるが、店内の2/3は生鮮食品などのスーパーのようなつくりになっており、地元の方々が日々の食材を調達するために営業しているような様子であり、観光客用に販売に力を入れている様子は感じられない。平日の昼間と言うこともあってか店内の客もまばらで、店内に活気が感じられない。まだまだ時間があるので、炭鉱跡博物館を見学しようということになり夕張市役所を通り過ぎて車を走らせる。博物館入り口に到着すると駐車場に一台の車も停まっていない。嫌な予感がする。予感的中し定休日は月曜日とかいてあるにも関わらず、入口には「本日休館」の看板が立っている。少しでも夕張市にお金を落とそうと考えていたのに大誤算である。仕方無く前回先輩議員達がきた時に訪れたメロン城なる施設に向かうことにした。車を走らせること約10分。メロン城が見えてきた。ところが入口に鎖が掛かっており、すでに閉館している様子。インターネットで調べるとやはり営業していなかった。仕方無くそのまま山道を登って、夕張市の公園に向かった。水俣市でいえば中尾山公園みたいなところで夕張市が一望できる。ところが一部の柴の公園以外はバリケードで立入禁止になってお

り、大きな建物は以前はお土産売り場やバーベキューが出来る施設があった様子だがそちらも使われていない様子。どうにもこうにも仕方無いので再び車を市街に走らせ、夕張駅の駐車場に車を止めて約束の3時になるのを車の中で待った。その間、数人の旅行者客みたいな人以外、地元の住民の姿を見ることは無かった。いよいよ、3時になり夕張市役所の指定された会議室に入ると、財政再建に取り組む中とあって、これまで視察で訪れた自治体とはずいぶん勝手が違って、我々水俣市議会議員団を含め3つの団体の合同視察というかたちで研修が始まった。説明をして下さるのは財政課長の石原さんと議長さんであった。内容は以下の通り。

1. 夕張市の人口について、昭和35年に116908人をピークに炭鉱閉山と共に人口が激減し、現在では1万人を割り込んでいる状態。全国の平均値と比べても60歳以上の人口は56.3%、14歳以下の比率は僅か6.1%と超少子高齢化となっている。
2. 炭鉱の衰退と観光産業への転換、昭和35年には17の炭鉱を抱え、従業員数は17294人もいたが、エネルギーが石炭から石油に転換されてから閉山が相次ぎ、昭和50年には炭鉱が5となり、平成2年には全ての炭鉱がその幕を閉じた。炭鉱産業の衰退に危機感を感じた夕張市は昭和50年代に入って観光開発に力をいれ、昭和55年、炭鉱博物館（現指定管理）、SL館（休止）、昭和56年炭鉱生産館（指定管理）、昭和58年、知られざる世界の動物館（解体）、遊園地施設「アドベンチャーファミリー」（解体）昭和60年、メロン城（売却）昭和61年、ホテルシュパーロ（指定管理）、昭和63年、ロボット大科学館（解体）と次々に誘客施設をオープンさせ、観光客の誘致に予算をつぎ込んだ。平成5年度には230万人もの観光客が訪れたが、年が経つにつれ、年々人数は減少し、平成25年度には60万人にまで落ち込んでいる。
3. 夕張市の財政破綻は上記の状況から主に5つの要因が考えられる。①閉山対策等による公共施設への過大な投資。②行政体制の効率化の遅れ。③観光施設への過大投資。④賛嘆地域臨時交付金、地方交付税等の歳入の減少。更には、⑤不適正な財務会計処理による赤字表面化の回避と累積赤字の拡大により財政を圧迫しつつには破綻した。（詳細は別紙資料を参照）
4. 夕張市の財政再建計画について、平成19年3月に総務大臣の同意を得て平成18年度から平成36年度にかけて総額353億円の赤字を解消すべく徹底した行政のスリム化と事務事業の抜本的な見直しを図ると共に市民生活に必要な最小限の事業以外は原則廃止にした。税率の見直しにより市税の増収を図ると共に受益者負担を増額し徴収率向上対策を講じ歳入を確保した。平成18年度から20年度までの3年間は計画通りに赤字を解消したが諸課題が発生し、必要な変更を行い5回の計画変更を行った。

財政再建途上の夕張市の赤裸々な現状を聞き、明るい話題のほとんどでなかった研修で大変暗い気持ちになった。いつ水俣もそのようになるか分からない。いずれにしても、身の丈にあった財政管理を心がけ明日は我が身と肝に銘じて市政運営にあたらなければと痛感した視察であった。尚、視察を受け入れてもらうために視察費用を夕張市に納めてきた。それほど苦しい事情であると察する。町全体が息苦しいほど暗い雰囲気の中に包まれていた。ある議員がぼつりと言った「貧すれば鈍する」という言葉が印象的であった。

以上